
ただいま高橋さんが『逃走中』です。

ふえにもーる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただいま高橋さんが『逃走中』です。

【Nコード】

N7223R

【作者名】

ふえにもーる

【あらすじ】

ネットサーフィン中に応募したら、なんだか当たっちゃったので『逃走中』に参加してみた高橋さんのお話です。

高橋さんシリーズ番外編。

※Smile Japan企画作品

その0 おーぷにんぐ

『逃走中』とは。

フジテレビにて不定期に放送されている特番。

十数名の参加者達があるテーマパークなどを舞台に、ハンターと呼ばれる黒服の男達（いわゆる鬼ごっこでいう鬼）から逃走し続けて賞金を獲得するのが目的の番組。

一秒ごとに200円が加算され、一時間半逃げ続けて最大賞金は108万円となる。

ハンターは場内をくまなく探索して歩き、参加者の姿を認めると全速力で確保のために走る。追いつかれ、身体に触られた時点で確保となり、捕まった状態となる。捕まると参加者は場内の檻に入れられ、以降のゲームをモニターで傍観する側となる。もちろん、確保された時点で賞金は0円となる。

ゲームは予め用意されたシナリオに沿って進行する。物語形式になっており、ある世界を舞台にドラマ仕立てのシナリオが繰り広げられる。参加者はその中に存在しており、時にはシナリオの鍵を握るクエストを与えられる事がある。

クエストに参加するかどうかは自由であり、参加しなくても良い。参加した場合、場内を激しく動き回る必要が出てくるためにハンターに見つかりやすくなるリスクがある。

ただし、クエストは参加者自身のペナルティに直結する結果が多く、リスクを犯してでも参加した方が結果的には良い場合もある（賞金に関する事だったり、ハンター数増加の危険などが伴うため）。

確保された参加者は、敗者復活イベントが行われない限り失格で賞金は0となる。それを防ぐため、現時点での賞金を丸々もらってゲ

ームから離脱する事の出来る電話ボックスが、場内の数箇所を設置される。

賞金を取るか、名声を取るか、それは参加者自身にかかっている。

『高橋さん』とは。

本名、高橋千奈美。私の作品のオリジナルシリーズ主人公。作品によって年齢が変わる。25・26・27・28歳辺りが多い。

考え方がちよつと弱気でナイーブで、実の母親に苗字で呼ばれたりする、運の無い残念美人。いちおう、黒髪のみドルヘアのイメージ。服には気を使っている様子。

出てくる世界によって神様だったり、現実の人間だったりする。どうやらいくつかのパラレルワールドで、複数の同じ高橋さんと思われる人物が存在している模様。

ちなみに現実の高橋さんは、神奈川県の川崎市辺りに住んでる設定です。

ただいま高橋さんが『逃走中』です。
おーぷにんぐ。

晴れ渡る三月の蒼穹、照り付ける初春の太陽、そして凍えるような氷点下に近い強風。

「寒い、寒い、寒い」

ああもう、やだやだ、捕まりたくない。

「ちよつと、冗談じゃないってば！」

機械的な走りのサングラスのハンター達は皆、鍛え抜かれた鋼の足に加え、的確な判断力、驚異的なまでの動体視力を有している。

一度その目に的としてロックオンされれば、地の果てまでも視界に入り続ける限り追いかけてくる。

「もう許してええ」

情けないくらい歪んだ声を出しながら私は逃げ惑う。だがその言葉とは裏腹に、足はスムーズに回転している。ああもう、なんでもいつもこうなんだろ。ドッジボールだって球取れないのに最後の一人になるまで逃げ回ってた思い出あるしさあ。

しかもなんかあの黒服こわい。額には血管浮いてるし。あれで白筋肉だとちょっと私苦手かなあ。

「もう来ないでええ」

無我夢中で螺旋階段を上り、ガラス張りの床の上にぺたりと座り込む。ああ良かった、もう追いかけてこない。心臓超はやい。やばい、血が足りない。今夜はレバニラにしよ。

あれ、ハンターがなんか全面ガラスの床越しに私の下からガン見してるんだけど。なにあいつ、気持ち悪いなあ。

「あ」

今日、スカート穿いてきてたんだった。

そのいち

一ヶ月前、自宅でインターネットを覗いてみると、番組のホームページで募集が掛かっていた。

『今回は一般参加のみで番組を収録する予定です。参加者を募集しています』

へえ面白そう。この番組、前も見ただけと一度やってみたくなって思ってたんだ。なにに、「特別な資格はいりません。やる気さえあれば構いません」

なら私オツケーじゃん。こう見えても足には自身あるんだよ。高校時代のあだ名は……いいや、やっぱ思い出すのやめよう。

一般参加ってことは、他にも色んな参加者来るんだよねえ。変態とかいたらどうしょ。とりあえずハンターに差し出しとけばいいか。

そんなわけで募集していたために応募してみたところ、こんな所に来てしまったわけなんだけど。開催場所は東京都二十三区外のあの街に存在するレジャーパーク、『氷城クリスタルガーデン』。ほとんどの建物に透明アクリル板の壁を多く使った、透き通る夢の国。さまざまなアトラクションがウリの、いわゆる遊園地みたいなトコで、氷城って名前の通りに一つの氷の城をイメージしてるらしいんだよね。夏は透明感があっていいんだけど、冬の今は寒々しくてあんまり良くない。

っていうか風通しが良すぎて寒いんですけど。ホッカイロどんだけ貼ってると思う？ 寒すぎてさっきトイレで脇腹にも貼ってきちゃった。

あと、ところどころに黒い耳つけたネズミみたいなキャラぬいぐるみが徘徊してるのは、きっと目の錯覚で、気のせいだと思うんだ。

ここに集まったのは私も含めて個性豊かな十四人の参加者たち。なんか見た目からしてすごくアクの強いのが数人居るんですけど。アレなんかツンツンの金髪に真っ黒なコートなんか着て。目元なんかアイシャドウしてる。あいつ男……だよねえ。何ここは、コスプレ会場？ あんなカンジのキャラ確かいた気がする。ん、自己紹介し始めた。

「僕は山田よしおです。初めまして。よろしくお願いします」

ちょ、礼儀いいし。見た目バリバリのギャル男なんですけど。たぶんいい男なんだと思うけど、あのアイシャドウはちよつと無理。こういうタイプに限って意外としぶとく生き残りそう。

あとの十二人は、今はいいや。なんかみんなアクが強そうだから。日本語で質問するとタガログ語で返ってきそうないメージ。

ゲームのルールは、元々テレビで見てたからだいたい知ってる。追加ルールさえ無ければ。ん……やっぱりカメラの前だと緊張する。なんか化粧崩れてきそうでちよつと怖い。鼻水出ないように気をつけなきゃ。

参加者全員にはゲームの進行状況を知らせるための連絡用ケータイが渡された。私にも。なぜかバッテリーが少ない。

とりあえず私の方針としては、安全な場所を探して隠れてる戦法が一番いいと思うんだ。ただ、このアクリル板だらけの場内で安全な場所があるのかわかんないけどね。こんなトコを会場に選んだやつはきつと人間的にかなり性格捻じ曲がってると思う。責任者出せ責任者を。

そんなこんなでゲームは始まりそう。私が何も言わなくても、テレビ局の人は淡々と説明をして、さっさと収録終えて帰りたい気分満々だという空気を醸し出している。あー、この番組ってこんな風にして作られてたんだ。ぶっちゃけ誰が出てても同じような。

スタートラインに付き、カウントダウンが始められようとしている。スタートして六十秒後にハンターが四体放出されるみたい。こんな所でのんびりしてる暇は無いっての。

「おら、俺が先だ！」

「へっ」

首のフールドで絞められるようにしながら押し分けられ、私は気付くとスタートラインの一番後ろになっていた。ひーどーいーっ！

あ、やばい、スタートのホイッスル鳴っちゃった。とにかく逃げなきゃ。

そのに

一番最初に向かったのはガーデンスクウェア。パンフレット見ると広場のようになっていてる所らしくて、その周りを取り囲むようにして木々を生やしてあるみたい。

私の立てた作戦はこう。とりあえず木に登って、茂みに隠れてやり過ごす。こう見えても運動神経はいいんだからね。サル女（通称）のあだ名は伊達じゃないよ。あ、決して顔がサルみたいなわけじゃないからね。勘違いしないでよね。

思ったとおり、一見すると見晴らしの良い所だから参加者達は誰もこのガーデンスクウェアには逃げてきてない。普通に考えて見つかりやすそうな場所だもん、当たり前だよ。その裏をかこうというのが私流よ。

幹に手を掛けてすると木に登ってゆく。小さい頃、隣の家の枇杷の木に登って良く叱られたっけ。勝手に食うなって。落ちたら危ないから心配してくれてたわけじゃないんだよね。

（メールか）

開始十分、早速第一のメールが届いたみたい。木の枝に寄りかかるようにしてポジションをキープすると、ポケットから取り出して早速ケータイを開いた。

その頃、会場内では一人の怪しいサングラスの男が、小さな女の子を人質に逃げ回っているシチュエーションの物語が始まっていた。男はいかにも悪そうなヤクザ崩れのような風貌であり、無精髭にボサボサ頭。そして汚いカーキ色のコートを羽織っている。

まだ幼稚園児と見られる女の子の手を片手で引きながら、もう片方の手には包丁が握られていた。

「たすけてえーっ」

何だか棒読みな女の子の悲鳴が会場内に木霊する。誘拐犯と見られる男もまた、下卑た笑いを漏らしながら追ってくる警察官を威嚇していた。

「へへへ、あんまり俺を怒らせない方が良いいぜ。なんたって、俺にはこんな可愛い人質がいるんだからなあ」

包丁をちらつかせながら女の子を盾に、階段を下り始める。

「くっ、これでは撃てない」

制服姿の若い警察官役の男は、動揺するような動きを見せながら銃口を犯人に向けて追跡していた。

「きさま、卑怯だぞ。女の子を盾にとって、大人気ないと思わないのか」

「うるせえ。助かりやいいんだヨッ」

会場内のモニターにはその物語の一部始終が流れている。あくまでもこれは逃走中の番組内で行われている寸劇であり、テレビの前の人達を楽しませる意味合いが強いのだが、参加者にとってもクエストが発生するために、見逃せない内容となっている。だが、映像から全ての事が分かるわけではない。

「今、我々の仲間がきさまを捕まえるために応援に向かってきている。逃げられはしないぞ」

「捕まりやしねえって。俺には秘策があるんだからな」

犯人は女の子を連れて建物の最上階へとやってきた。屋上庭園となっているその場所は強風が吹き荒ぶ。やがて警察官も追いつき、二人は対峙する。

「これまでだな。観念しろ」

「ふふふ」

犯人は不敵な笑みを浮かべる。風は強く背後から吹き付けている。

「俺とお前、風上に居るのはどちらだ」

警察官は意図が分からず、首をかしげた。

「何を言っている」

その時、一気に強風が吹いた。

「今だ」

犯人が懷から何かを出し、思い切り風下の警察官に向かってそれを投げつけた。

「うわ」

大量の砂が入った薄い袋は犯人の爪で破れ、顔に向かって投げつけられる。警察官はそれをもろに浴び、怯んだ。一気に間合いを詰め、犯人は警察官の首を殴って昏倒させた。

「アハハハ、これでもう誰も俺を捕まえられねえぜ」

犯人は拳銃を奪ってしまった。空に向かって高笑いする犯人は、カメラを通じて十分凶悪に映っていた。そして、女の子は緊張感の無い顔で笑っていた。

メールを開くと、そこには第一の指令があった。

『クエストナンバー1…西のショッピングモールの一角にAEDが設置してある。AEDを回収し、空中庭園で心停止状態になって倒れている警察官を蘇生させ、仲間の警察官に状況を報告させよ。』

ただし、残り時間が一時間を切った時点で警察官は死亡してしまい、ペナルティとして犯人の仲間が会場内が増えてしまう。犯人の仲間は参加者達を探し回り、見つけ次第参加者の居場所をハンターに伝達する』

って、あと十分しか無いんですけど。なにこの最初からシビアっぽい内容。ああもう、どうしょ。誰が行くんだよー。あ、もう一通メールが来た。

『参加者…岩肌鉄男さんがハンターにより確保。残り十三名』

あらあら、全然紹介してない内に一人捕まっちゃった。ま、いいや。さーて、クエストどうしよう。このペナルティも地味にキツイ気がする。でも、もし警察官が死亡しちゃった場合、シナリオどう分岐するんだろ。それも地味に興味ある。

さて、私は……。

そのさん

せっかく登った木をすると降りてゆく。豪快に飛び降りたお陰で人目が気になる。スカートの意味で。

「やっぱり行くよねーっ」

何で私っていつも余計な事にばかり首突っ込んじゃうかなー。

頭の中のどっかの神経は『やめとけやめとけ。そんなクエスト誰かに任せろ』って全力で拒否ってんだけどさ。

でもさ、警察官死んじゃったら嫌じゃん（例えフィクションでも）。すごく後味悪いしさ。その後リスクが急が増えるんだから。通報人がいるだけでこのゲーム、生き残る確率はぐんと減るよ。だって以前のゲームだってそういうのあったもん。なんかくるりんくるりん自在にマウンテンバイク操って参加者達を探し回る連中とかさ。んで見つかるのと笛吹き鳴らして通報するの。あんなの来たら私とか即死だって。きっと今回の増える犯人の仲間も、それと似たようなモノに決まってるよ。絶対増やすわけにいかない。

とりあえずガーデンスクウェアを後にして、ショッピングモールへ向かわなきゃ。パンフレット見ると、ここから真逆の方向。ここ東。ショッピングモールは西なんですけど。ハンター四体の中で大移動。さあ早速死ぬかも。あはは。アクリル板だらけだから隠れる事も容易じゃないよね。幸い、相手は機械的で待ち伏せとかはされない設定だからそこだけは助かるけど。

少しでも見つかるリスクを避けるために植木の下を、姿勢低くしながらそろりそろりと移動してゆく。

（やばい、何か来る）

植木の陰に隠れながらじっとしてやり過ごすと、丁度目の前を黒服のハンターが一体通過していく。相変わらず機械的だなあ。ハンターって何か食べんのかな。電池？ 充電式？ 口にコンセントとか挿すのかな。

「よっ」

いきなり背後から肩をぽんと叩かれた。びっくりして声を荒げそうになったけど、何とか堪えた。自分の手で口を抑えるなんて、漫画みたいだと思ってたけど現実にはやるとは思わなかった。

「ちょ、脅かさないでくださいよー」

「いやあ、高橋ちゃん一人じゃ心配でさ。丁度見つけたから」

なんかハゲたおじさん。開始前に話しかけられて少し世間話したら気に入られちゃったみたいで。ん、変だなあ。確かにハンター以外何の気配も感じなかったのに。この人名前なんていったかなあ。あ、そうそう。毛増^{もぞ}たけしさん。毛は無いけど毛増さん。

すごくいい体格してる。けど、走ったらすごく速くて意外。

「大丈夫ですよ、私なら。これからクエスト行ってくるんです。毛増さんは」

「そうなんだよ。僕も向かってる所なんだ。ここからじゃ遠くって困るよね」

一緒に行動していると危ないような気がする。人数増えると身動き取れなくなりそう。

「ついさっきも……。わ、やばい！」

一足先に駆け出した。さっきのハンター戻ってきてるーっ！やばいってやばいって。超ロックオンされてるし。もういいよ、オチヤン放って逃げるって！もうだめだめだめ許して。ああもうだめ、鼻が垂れてきた。

一步遅れて後ろで毛増さんも反応遅れたけど私を後ろから追いかける形で走り出してきた。っていうか何で私を追っかけてくるのよー！横道入れよーオチャン！、これじゃあんたが捕まったら次は私じゃないのよー。

曲がり角を鋭角に曲がると、階段迷路みたいになっていた。何かのアトラクション？階段が三本地面から伸びてて、三つ編みお下げみたいな絡みかたしながら上の階に向かって伸びてってる。どれも違う建物の入り口に入るみたい。んー初めて来た場所だからどこ

繋がってるかなんてわかんないよ、もういい真ん中登る！

まるで非常階段みたいにぐるぐると回りながら登ると、三階部分まで繋がってた。中はアミューズメントパークになっていた。ゲームコーナーやボウリング場なんかもあるみたい。

「あ、そうだ。あのオチャンは」

ケータイは鳴る様子は無い。どうやら逃げ切れたみたい。ほっと一息つくのと、時間を確認した。クエスト失敗時間まであと六分。急がなきゃ。まだAEDまで辿り着いてないのに。もう散々だよー。追い掛け回されるし。

ん、あれ、仕舞った直後にケータイ鳴り出した。ま、まさか。

『参加者…田中つぐおさんがハンターにより確保。残り十二名』

あらら、また全然紹介できてない人が捕まっちゃった。あのオチャン意外と丈夫だね。全部ハンターあの人の所に回そうかな。走りすぎて心臓破裂しちゃうかな。食事の塩分キツそうな顔してたし。そんな事考えながらケータイの画面に集中して歩いてたら、格闘ゲームやってたお兄さんの背中に尻アタックしてしまった。お兄さんごめん、勢いでボタン全部押させちゃってごめん。変なビーム出ちゃったね。しかもそれで勝っちゃったね。まいつか。

あれー、外には一般客居なかった気がするんだけど、なんかゲーセンには居るなあ。ここだけ特別？ お客に紛れてれば意外と見つからなかったりして。

そのよん

と思ったら早速こんな所にハンター居るのね。相変わらず機械的。うーんうーん。通りそうな所にボウリングの球でも転がしておいてハメてみたい。どんなリアクション取るんだろ。機械的に転ぶかな。立ったままの姿勢で倒れたり。

ん、あそこで客と一緒にボウリングしてるのは……。『僕は山田よしおです』。の山田よしおだ。金髪のコスプレみたいな奴。化粧とかしてるよ。汗で崩れてるよ。

あれ、ハンター気付いてない。山田よしおが目の前に居るのに気付いていない！ てくてく歩きながらふと、周りをきよろきよろ見回す。すると小さく欠伸を漏らした。なんか幻滅。

とにかく今はAEDを手に入れなきゃ。山田を放っておいてゲームコーナーを飛び出した。外に出ると今まさに別のハンターに追いつけ回されているギャルが、ドッジボールを上手く避けるようにして身体を捻ってかわしている。なんてすばしい。

今のうちに私はAEDを取りに行こう。西のショッピングモールへはもう目の前。AEDが設置してあるのは広場のど真ん中みたい。ケータイに送られてきた画像によるとかなり分かりやすい場所のようだから、行けさえすれば問題無いと思う。

あああ、時間がやばい！ もう五分無いし。警官死んじゃう。生きれ！ 思い切って路地から飛び出す。ショッピングモールが放射状に広がり、円型になってる。中心は小さな広場となっていて、そこには噴水がちよろっと吹き出していた。

「あつた！」

噴水の横には分かりやすく『AED』って赤い文字で書かれた紙が箱に貼り付けられている。突っ込みどころ多いなあ。分かりやすくもいいけど。丁度みかん箱みたいなサイズの段ボール箱の中には、本格的なAED一式が入っていた。そして注意書きがある。

『注・このAEDは使い捨て。一回しか使えません』

んー。別にいいじゃん。さっさと警官を蘇生させればいいんだし、一回しか使えなくなったらって問題無いっしょ。ご丁寧にこんな説明なんか付けちゃって、無駄無駄。

今度は警官の倒れている所まで行かなきゃ。ってこのAED、けっこう重っ。本物ってこんなに重いのか？　なんか米俵担いでるみたいなのがするんだけど。

と不思議に思って裏返してみたら嫌がらせの如く五キロの鉄アレイが縛り付けられていた。このいたずら考えたスタッフ、後で覚悟しときな。しばく。

下らないいたずらに付き合ってる暇は無いし、さっさと鉄アレイを捨ててAEDを担いでゆく。空中庭園までは距離にすれば近いはず。ただ、途中でハンターが邪魔してくるかもしれない。しかも肝心な事に私はAEDの使い方を知らない。説明は中に入っているみたいだけど。

ショッピングモールを後にし、ひたすら空中庭園を目指す。そこまでは、ひたすら長い階段を登り続けなければなんない。ああやばい、あと三分しかないよ。頑張ってるんだから三十秒くらい警官の心臓ボーマスで動いてくれないかな。

なんか参加者の一人だった気がするおっさんが木に張り付いている。それ何ごっこ？　暇そうだし手伝ってよ。

「お、それはAEDじゃないか。クエストやってるんだね。偉い偉い」

「いいから手伝ってください」
偉い偉いとか何なのよあんたはー！　手伝う気になってくれるのは嬉しいけど、ゼロ距離で付いて来ないでよ気持ち悪いよ。ハンターに突き出すよ。

空中庭園まであともう少しといった時、地上八階分くらいある階段をひたすら登り続けていると途中の踊り場に男の子が立っていた。しかも演技で泣いている。

嫌な予感がしたので足早に。

「えーん」

「スルースルー」

すると男の子はこちらの後を追いかけてきた。おっさんと男の子の二人にモテてる……。同じモテるなら若い方だけでいいよ。

「えーんえーん」

「スルースルー」

「えーんえーんえーん」

「スルースルー」

「えーんえーんえーんえーん」

超絶振り返りスマイル。

「だーもうるっさいなー！ 嘘泣きなのはわかってんのー」

「ママが死んじゃうよーえーんえーん」

って、目元隠してるけどこの男の子口元笑ってますよ。ねえ。ボクう、一体何のお菓子でテレビ局のスタッフに雇われたのかなあ？ まあここで男の子見捨てていくのもなんかアレだし、時間も押してるけどとりあえず立ち止まってみた。

「四階でママが死にそうなの。そのAEDでたすけて！」

はいスルー決定。警官トコ行くよ。

「ひきょうものー！」

何とでも言うがいい、私はクエストするんだ！ 第一、フィクションの物語なんだから本当に死ぬわけないじゃん。放っておいたって問題無いよ。

AEDが一度しか使えないって注意書きがあったのは、きっとこのためなんだと思う。警官かこの子のママ役か、どちらかしか選べない二者択一だったって事なんだ。

私はガン無視して警官の所に走った。何の役にも立たないおっさんも後ろから付いてきた。

「ねえねえ高橋ちゃん、そのAEDどうやって使うの？ おじさんわからないなあ」

「いいからハンターの図とかやっててください」

「嫌だよ、捕まっちゃったらどうするのさ。誰が高橋ちゃんを守るんだい」

自分で守るよ。

「いたいた警官。あと一分しか無いよ」

空中庭園の真ん中には、間抜け面して倒れている警官の姿があった。ていうか寝てない？ うっすらと寝息聞こえるよ。

「ああもう、おじさんピーンチ！ AEDの使い方が分からない」「だからそこら辺でハンターの図しててください。私がやるから」
「使えねーと思いつつも、愚痴っている時間が勿体無いためにすぐさま腰を下ろしてAEDの説明書を読んだ。蓋を開けると内側に簡易説明書が入っており、人間の身体の図と共に説明書きが入っている。」

とにかく、やってみるしかない！

残り十秒ほど。漫画みたいな展開だけれども、何とかAEDを説明書どおりにセットして起動した。すると警官は電気が通ったロボットのように一瞬で起き上がって元気になりおった。

「ありがとう。蘇生してくれて」

握手を求めてきたけど右手は出さなかった。

「ん、別にいいですよ」

するとすぐに警官は装備の無線機に手を伸ばした。

『こちら伊藤！ 犯人との交戦の末、取り逃がしてしまった。急いで非常線を張ってくれ。今ならまだ間に合うはずだ』

なんか平和な言い方だなあ。そしてすぐにメールが届いた。

『参加者…高橋千奈美の活躍によりクエストクリア。犯人の仲間達が増える事態を防ぐ事に成功』

ああ良かった。こうやって自分の名前が出ると、何だかちよっと嬉しいよね。やっぱりやって良かったかも。あ、またメールだ。

『参加者…林 太良夫さん、森 福男さんの両名がハンターにより確保。残り十名』

はいダブルヒット！ ハンター様おめでとうございます。一緒に居たら共倒れのパターンかな。ご愁傷様。

そこからはしばらく、また木の中に身を隠して過ごしていた。そして残り時間が四十分ほどになった時、再びケータイが鳴った。いやーな予感。

『参加者…渡辺 真さんが人質に捕られ、口を割って犯人にあなたの居場所を伝達いたしました。犯人は参加者の居場所をハンターに通報します』

……は？ なにそれ。ん、続いてまたメールが来た。

『クエストナンバー2…届くメールをよく読み、正しい行動をせよ』
なんだよそれー！ ヒント少なすぎ。うわ、次々にメールが来る！ 二件、三件。

『非常線を張られて逃げ場を失った犯人達が、場内に居る参加者達を無差別に捕まえて人質を取り始めた。』

人質になった参加者達は、隙を見て犯人から逃げ出す事が出来ればゲームに復帰できる。逃げ出せずに十分が経過した場合は強制的にゲーム失格となる。

人質になった場合、他の参加者の居場所を教えて寝返る事で、その時点での残り脱出時間を倍に伸ばす事ができる。その場合、居場所を教えられる被害にあった参加者には即メールが届き、その場から離れた方が良い旨が伝達される』

って私ヤバイじゃん、渡辺とかいう奴に生贄にされた！ あーもー、逃げなきゃここにハンターが来ちゃう。仕方ないなあ。

そのこ

木を降りてそろりそろりと隠れられる場所を探しながら再び移動を開始した。物陰に潜んで先ほどまで登っていた木を見返すと、丁度ハンターが歩いてやってきた所だった。ふー危ない危ない。どうやらさっきのメールは冗談じゃなかったみたい。と思つてると再びメールが来た。

『参加者…梁瀬 流花さんが人質に捕られ、口を割って犯人にあな
たの居場所を伝達いたしました。犯人は参加者の居場所をハンター
に通報します』

『参加者…堀切 数馬さんが人質に捕られ、口を割って犯人にあな
たの居場所を伝達いたしました。犯人は参加者の居場所をハンター
に通報します』

『参加者…副田 信吾さんが人質に捕られ、口を割って犯人にあな
たの居場所を伝達いたしました。犯人は参加者の居場所をハンター
に通報します』

『参加者…古橋 隆吉さんが人質に捕られ、口を割って犯人にあな
たの居場所を伝達いたしました。犯人は参加者の居場所をハンター
に通報します』

「……」

なにこれ。いじめ？ 四人いっぺんに捕まって、みんなが私の居
場所教えてるし。ていうかもう残っている人達の半数が人質になっ
てんじゃない。これ、もはやみんな協力する気無いよね。

いや……、私以外のみんなが協力してるの？ 私だけ孤立して一
人ぼっちってわけかもしれない。そう考えるなら、被害に遭わせる
のは協力していない人間が一番適任っていうのは納得できるけど。
とにかく逃げられる所まで逃げるしかないよ。ていうか意外と私
って悪運とか強いしさー。ピンチにはなるけど死なないようなタイ
プな気がするし、割とあっさりクリアできちゃったりして。

あははは。はーっ……来た来たハンター！ 前方から黒いのが迫ってくるうう。速い、速すぎる。咄嗟に止まっている観光バスの後ろへ回った。やっぱりハンターも回ってきた。でもここで諦めるわけにはいかない！ このまま捕まっていたまるmondですか。生贄にした分、賞金とって他の参加者達に悔しがらせてやるんだから。賞金もらったら何に使おうかなーあはー。ちわわでも飼おうかな。あ、ウチのアパートはペット禁止だった。

なんてことを考えていたら目の前からもう一体ハンター追加。だーっ、一体何人に生贄にされたんだったっけ。四人だ、確か。一体は撒いたからいいけど、あれからほとんど動いてなかったから残りのハンター三体が一斉にこっちに向かってきていてわけなんだ。うっわひどい。

私を好きになって付いて来てるのはいいけど、ヒゲくらい剃ってくださいーい！ なんかスチールウルミたいです。ほら、鍋底の焦げ付きとかゴシゴシやって落とすやつよ。そんな顎で間違っても赤ちゃんの頬とか擦らないでね。一生恨まれるよ。

前からも後ろからもハンター来てどうしようもない挟み撃ち状態。咄嗟に脇道へと駆け込んだ。狭い路地には喫茶が何店か並んでいて、その入り口にはやたらでかくて邪魔な看板が置かれている。これじゃ普通だってまともに通れないって。

けれどそこは私。キャスター付き看板を、身を縮めてすり抜ける。逆にハンターに向かって転がしてやった。二つ連続で。飛び越えるには大きすぎるし、すり抜ける事も出来ない。しかも連中は全力疾走しているので咄嗟に止まらない。

ナイスショット！ ハンターさん転倒でございます。すってんころころ。二人まとめて。もつれるようにして倒れました。今のうちに逃げよう。

時計を見るとかなり長い時間逃げ続けていたみたい。数十秒かと思ったら何分か経ってた。あの全力疾走に近いスピードで持久走やっていたって考えると、私って割と体力バカな所がある。残り時間は

……うわ、あと二十分。もう少しだよ。けどここからが本当の勝負な気がする。時間が少なくなるにつれて、きっと恐ろしいクエストが発生すると思うから。

その時、メールが届いた。

『参加者…渡辺 真さんが人質からの脱出に失敗。ゲーム失格。残り九名』

『参加者…梁瀬 流花さんが人質からの脱出に失敗。ゲーム失格。残り八名』

『参加者…堀切 数馬さんが人質からの脱出に失敗。ゲーム失格。残り七名』

『参加者…副田 信吾さんが人質からの脱出に失敗。ゲーム失格。残り六名』

『参加者…古橋 隆吉さんが人質からの脱出に失敗。ゲーム失格。残り五名』

うっはあ、一気に五人消えた！ 捕まらなくて本当に良かった。五人とも捕まって誰も脱出できなかったんだから、相当難しい脱出ゲームでもあったのかも。ふっふーん、ごめんねー。お金は私がありがたくもらってあげるからね。人のこと生贄にしたんだから、何にもおごってあげないからね。

いよいよ残り二十分、そろそろ後半戦かな。一度気を引き締めないと。また逃げられるように体力残しておかなきゃね。ここまで来たら本気で生き残るよ。

そのろく

その頃、犯人達は警官隊により包囲されて人質を取っていた。クリスタルガーデン三階にある劇場ホールの中に、一般人達が大勢収容されている。

犯人のリーダーが大口を開け、マイクで会場内に設置されたスクリーン全てに生中継していた。

「警官ども良く聞け。逃走用の車を用意し、俺達全員を無事に逃がせ。要求が呑めなければ、恐ろしい事が起こるぞ」

犯人達が用意したビデオカメラの映像なのだろう。劇場ホールの中には、ロープで手足を縛られた一般人達が転がっている様子が映されていた。その数、軽く見ても二十人以上は居る。

スクリーンの映像は切り替わり、警官隊が今まさに突撃しようかという場面が映し出された。劇場ホール内の犯人達の声明を聞き、先頭の刑事が犯人と交渉しようとしている場面になった。

「くっ、今すぐ人質を解放するんだ。お前達は包囲されているんだぞ。逃げられはしない」

「そう思うか。だが残念だったな。俺達にはお前達を出し抜く方法があるんだよ」

「我々の交渉に応じるつもりは無いのか」

「あるわけ無いだろう。行くぞ」

犯人のリーダーの手により、取り出されたりリモコンのボタンが押された。

まーたメールだ。面倒くさい事になりそう。でも見ないわけにはいかないものね。と思ってケータイを取り出そうとした時、何か感づいた。

（ん、ヤバイカンジが）

こうやって第六感的なものが働く時っていうのは、絶対に何かある。頭のどこかが反応している。とりあえず看板の陰に隠れて周りを確認してみた。心臓が高鳴り始める。

（カメラマンだ）

その喫茶店の影に何かいる。後ろから撮影しているカメラマンだけがここから見える。もう一つおまけにケータイが鳴り出す。

（ちょ、ちょ、なんでこんな時に。うるさいって）

その音に気付いて物陰から出てきたのは、参加者の一人だった。和柄のどろんどろんしたTシャツにハーフパンツ、そして割とシャレたカンジの黒いキャップ。サングラス。

（良かった。ハンターだったら終わってた）

安心して看板から姿を現すと、全力ダッシュしてきた参加者の姿があった。でもそういえばあんな人、居たかなあ。最初の顔合わせの時にはいなかったような気がするんだけど。

あれ、サングラス？ なにこれ、しかも走ってきてる。まさか。

「変装ハンターなんて聞いてないって！ ひどい」

見つかった。まさか一般人の格好してるなんて思わなかった。足元の縁石に足をぶつけて痛い思いをしながらも、とりあえず逃げる事にした。

そんな、いつの間にミッション発動してんの。そんな知らせなんか——って来てたじゃん、メールが。見忘れてた。ヤバイよ、一般人も沢山居る中でハンターが一般人に変装してるなんて。黒いスーツにサングラスってのが通例なのに。これ最悪じゃん。

正直、笑える状況じゃなかった。妙に足速いんだもん。体育大学のバイトでも雇ってるんじゃないのコレ。

「あーもー、来ないでよ。来ないでったら！ 蹴るよ」

ま、そんな事言ったくらいで追いかけてくるのやめるようだったら楽なんだけどね。お構いなしに付いてくるよ。縁石も看板もするりと飛び越えて。その間を縫うようにして逃げている私も何なんだったってカンジだけどさ。スピード全く落とさずに身を細めてすり抜け

ているんだから。

こんな器用な事できるなら、もっとすごい人間になれた気がする。あくまでも気がする。たぶん本当はもっと色々必要だと思う。

そんなこんなで逃げてたらいつの間にか振り払っていて、それでもしばらく夢中になって走り続けていた。すると、気付いたら初めて来る場所へと辿り着いていた。ゲームが始まってからまだ一度も来ていなかった三階の劇場ホールだった。

「こんな建物あったんだ。ん、なんか中が騒がしいような」

屋外の映画館みたいな入り口を中に入ると、プラネタリウムみたいに真っ暗な中、天井に正座を象ったライトが無数に明滅していた。ゆったりと点いては消え、夜空に輝く星のようだった。

そして地面には数人の人間が倒れている。おーまいがつ。警察みたいな姿してるけど。またもや厄介な場面に遭遇。これきつとクエストの関係だよね。やった方がいいのかなあ。とりあえずさっきのメール見てみようかなあ。倒れてる人調べるのは後々。どうせ死にはしないんだから。

『クエストナンバー3…ハンター化した一般人を元に戻し、犯人のリーダーを捕らえよ』

なにこれ。さっきの？

『犯人達に人質として捕らえられた一般人十人が、ハンター化して解き放たれた。ハンター化した一般人は私服姿でサングラスをしており、参加者達を通常のハンターと同じように追跡し、確保する。』

凶暴なハンター化一般人の襲撃により、警官隊は壊滅してしまった。このままでは犯人達に逃げられてしまう。

会場内の南側に設置されたコンテナのボックスの中に、正気化スプレー十本、催涙ガス、手錠が用意されている。正気化スプレーを用いてハンター化一般人を元に戻し、催涙ガスと手錠を用いて犯人のリーダーを確保せよ。

尚、残り十分になった時点で犯人を確保していても、ハンター化一般人が一体でも残っていた場合、残りが本物のハンター化する。

又はハンター化一般人を全て正気に戻しても、犯人のリーダーが逃走成功した場合、元に戻した全てのハンター化一般人が本物のハンター化する』

だーっ、ヤバイの来た。これ最悪すぎる。つまり全てを見つけて対処する必要があるって事じゃん。残ってるの五人しかないのに、たった五人でこれを全てやれって無理があるんじゃない？ みんなで協力したとしても一人最低二体見つけて、その上誰かが犯人を確保しなきゃならない事になるよ。

ルールを見ると、ここでの優先順位はハンター化一般人を元に戻す事。犯人から見つけたとしても、一体でも残したら全て復活するんだから。ハンター化一般人から狙っていけば、取りこぼしが出ても全て復活する事は無いみたい。

いくらなんでもハンター十体増加っておかしいでしょ。限りなく全員終了するし。これとにかくやるしかない。他の人達もやる気になっってくれるばいいんだけど。

もし勝手にスプレー十本とも持ってっっちゃって、誰かが後から取りに來たりして。それだとやっぱまずいから、二本だけ持っていくことにしよ。

さて、時間もあと十五分くらいしか無いし、早くしよう。

らすと☆

南側のコンテナに来るまでに三分ほど時間を使っちゃった。普段は資材を詰めてある業務用コンテナみたい。何の変哲も罨も無く、ここまで来れた。途中に歩いている一般人が怖い。この中にハンターが変装して紛れているかと思うと不安になってくる。

どうやら無意識の内にこそそしてたみたいで、通行人がくすくす笑ってる。ああ、なんか情けない。でもいいか、今に始まった事じゃないから。

あれ、またメールが来た。

『クエストナンバー3追記…犯人を取り逃がして、ハンター化一般人を一体でも残した最悪の場合。残り十分になった時点で全てのハンター化一般人が通常のハンターへ変化し、加えて一階北側エリア以外の全てのエリアの出入り口が封鎖される。封鎖時に一階北側エリア以外の場所に居た参加者は、強制的に失格となる。』

この場合、最後の十分は残りの一階北側エリア内のみ移動可能になり、ハンターの数は元々の五体にハンター化一般人から変化した十体を加えた、計十五体になる』

……さーてがんばってクエストしよう。もうこれは、誰にも賞金取らず気無いでしょ。だって、パンフレット見たって一階北側エリアって狭すぎだよ。もはやこうなったら事実上のゲームオーバーに近いよ。十分間逃げ切れる自信は無いよ。猿女だけど

コンテナの中には逮捕用の催涙ガスと、手錠と、そして正気化スプレーがゼロ本。ゼロ本って何本かって？ ゼロ本だよ。無いんだよ、スプレーが！ 誰かが全部持って行っちゃったみたい。ああなんか不安。ここにあったはずのスプレー全部使ってハンター化一般人を元に戻さなければならぬのに。ちゃんとやってくれるかなあ。あ、良く見ると書置きがある。

『ハンターの方は任せてください。スプレーは全部持って行きます

ね、僕は英雄なので皆さんを守ってみせます。by山田よしお』

くおら、あのよしお。コスプレ男。何が英雄だ。だんごむしの間違いでしょっての！ そんな事とは露知らず、他の参加者達が一人、二人と集まってきた。

一人はもう六十歳近いおじさんだった。年季の入った髭を生やしてる。うん、かなりまともっぽい。もう一人は三十代の兄さん。体育会系のがっしりとした体つきをしてる。うん、かなり頼りになりそう。

あと一人は姿を現さない。クエストに参加しないつもりなのかな。「おお君、スプレーはあったかね」

おじさんの方が話しかけてきた。軽く息を切らしているが、まだまだ余力は残しているようだった。

「いえ、それが……。一人に全部持って行かれたんです。ひどいですよね」

兄さんの方も嫌な予感がしていたらしく、頭をぽりぽりと掻いた。「参ったね。何だか一人、奇抜な格好した男がいただろう。俺も、あの男が曲者じゃないかと思ってたんだ」

いやー、私も思ってたよ。放っておいたけど。

「こうなった以上、山田よしおにハンターを任せるしかありません。私達で犯人のリーダーをふん捕まえましょう」

といっても、残り十分で見つけるのは容易じゃないよねえ。三人で協力するって言ったって、捕まえる道具は一セットしか無いんだから、結局は誰かが先頭に立ってやらなきゃなんない。

「よし、とりあえず探すぞ！」

兄さんが先に走り出した。身長高いし、なんか頼りになるなあ。カッコイイなあ。……あれ、道具は置きっぱなしだけど。

「よし、私もだ。頑張って探そうじゃないか」

おじさんも走り出した。っていうか、兄さんと走っていった方向違うけどどうすんの。協力するんじゃないかったの。なんかすごく嫌な予感がするのは気のせいなんでしょうか。ううん、多分これはね

気のせいじゃない。

「私を置いて行くなーっ！」

久々に声を上げてみました。高らかに。はーっ……、もうみんな協力する気無いね。もう逃げるので精一杯なんだね。うん、分かった。思い切って催涙ガスと手錠を握り締めて駆け出す。もういいよ、私がやるしか無いでしょーが。

あまり北側エリアから離れすぎるとまずいなあ。もしも時間までに間に合わなかった時、戻れなくなっちゃう。強制失格は何としても避けたいし。ここまで来て諦めるのも癪だしさ。

武器は催涙スプレーだけっていうのが何とも心もとない。しかも後ろの説明書を読むと、殺虫剤とか作ってる日本企業製品で、しかも商品説明には唐辛子スプレーってなってる。目に掛けると単に痛くて開けられなくなるものって事ね。その隙に手錠でお縄にしろ。もうなんていうか、犯人のリーダー捕まえるのにこの装備って一体どういう事よ。現実だったら無理でしょ。きっと相手は銃とか包丁とか爆弾とか用意してるよ。死に行くようなもんだよ。ジェンドだよ。

でもさ、何処に行けば見つかるのかも分からないんだよ。闇雲に探すしか無いってことなんだよ。どーすりゃいいの。自動的に選択肢とか出てこないかしら。北へ行く、とか南へ行く、とか。そーいうお約束展開ならば絶対に正解の選択肢とかあるから楽なんだけど。ま、これは現実ですからー。現実ですからー。ですからー。

そうだ考えを変えろ。もし捕まったとしても、お金は元から無かっただけなんだ。それを増やそうとしたけど失敗した、っていう結果が付いてくるだけなんだ。そうそう、何も問題ないじゃない。元々無かったものが無いままになるだけなんだし。人間ポジティブに行かなきゃねー。

十分ネガティブだって？ 余計なお世話よ。

「くおらっ、行くぞー！」

世界のはじっこでくおらっ、行くぞーをさけぶ。一人で。虚しい

けど気合入れてみる。そして走り出した。どこまでも行ける気がした。あくまでも気がしただけ。

普段あまり運動してないせいで、荷物抱えて走っていたら一分と持たなかった。あんれー、意外と持久力はないんだな私。瞬発力はあるのに。

犯人のリーダーはどこだろう。格好はテロリストの服だね。恐らく、他の連中が着ていたのと同じ服。迷彩柄みたいなの。探すためにはやっぱりこういう風に見晴らしの良いところじゃないと。とりあえず三階の展望台まで登ってみた。ああ時間が無い。もしクエストクリアできなかつたら、この場所も封鎖されちゃうんだよね。ここに残ってたら強制失格かあ……。

「お姉さん、なんだか随分と焦ってるみたいですね。見つからないんですか」

「え」

後ろから声が。振り返ると、そこには高校生くらいで妙に髪を赤く染めてる女の子が一人。なにこの子、不良？

「さっき、催涙スプレーと手錠持ってきて来たんですよ。あのコンテナから。犯人、見つかりましたか」

「え、ええ。そうだけど。見つからないのよねー」

どうやらかなり長い髪みたい。縛ってポニーテールにしてる。上から下までのファー付きロングコートを羽織ってて、なんだかそれが不思議なセンスを感じさせる。

前髪もかなり怪しく長いけど、ちらちらと髪の間から覗く瞳は大人しい感じの女の子のものだった。ま、なんていうか顔立ちはこちらと日本人っぽくない気がする。西洋系っていうか。

ん、どこかで見覚えがあると思ったらこの子、参加者の最後の一人だわ。最初の顔合わせの時に居た気がする。誰とも話してなかったし、全く関わり合いが無かったから今の今まで忘れてた。よく捕まらないで無事でいるわ。

「実はあたしも、さっきコンテナに向かったんですよ。そしたらハ

ンターに追いかけて、振り切るのに必死で辿り着けなかったんです」

「あらあら、そりゃあ残念だったわね」

おしゃべりしてる時間ないんですけどおー。話とかしてないで犯人の居場所教えてくださーい、がきんちょ女。捕まえないとアンタだって危なくなるんだよ。ま、そんなもの知ってたら苦労しないか。「あたし、犯人の場所知ってますよ」

ちょ、思ってる側から人の心読まないでください。

「だから自分で捕まえようと思ったんですけど、既に道具は持ち出されているようでしたから」

「まあね。何なら二人で行こっか。捕まえるための道具は手元にあるから」

すると、女の子は首を横に振った。

「いいえ。あたしは別でやる必要があります。ほら、正気化スプレーを全て持ち出した変な男を捕まえて、道具を奪い返す必要があります。あの人だけでハンター化一般人を全て見つけ出すのは無理です。できるだけ多くの人が協力した方がいいはずです」

「ま、そうだけど」

「ほら、あそこにいるし」

と、女の子が指差した先には偶然にも山田よしおがぷらぷらしている。両腕をくねらせている。とてもじゃないがハンター化一般人を探しているようには見えないナルシストな歩きだった。

「わかったわ、山田よしおはアンタに任せるから。私は犯人のところにいく」

「はい。犯人の居場所は固定です。調べが付いています。場所は一階南側ゲートです」

よりにもよって、封鎖されるエリアの中で一番遠くってわけか。もし失敗したらそのまま北側に戻って来れずにタイムアウトだわ。「よし、じゃ私は行くよ。また終わったら会おうね。私は高橋。アンタは？」

女の子はワンテンポ遅れて答えた。

「神崎」

私は女の子に背を向けて、歩き出した。

「また後でね。ケーキでも奢ってあげるわ」

「はい」

なんだか不思議な雰囲気醸し出した女の子だったな。妙に存在感が無い割に威力のある言葉放つし。それよりも今は南側に急がなきゃ。あ、時間もやばい。あと五分か。これだけの時間で犯人を見つけ、捕まえ、北側エリアまで戻ってこなきゃならないんだ。とにかく走らなきゃ。あ、足が吊る。やめて。

「なんだってこんな面倒くさいクエストばかりなんだか」

南側ゲートへ辿り着いた。この正面ゲートのどこかに犯人がいるんだ。さあ探さなきゃ。と思ったら、何だか妙な人が入り口チケット売り場の壁にもたれかかっている。この場所で違和感バリバリの迷彩柄をした服を着てどこかに電話してる。私の第六感が『こいつだ』と言いはじめた。

目の前に歩み寄り、疲れた声を掛けた。

「捕まえますよ、いいですね」

有無をいわせない言い方をしながら手錠を取り出すと、男は電話をやめて答えてきた。

「だめです」

手を小さく振って拒否する仕草が妙に女々しくてムカついたので、とりあえず本音を言ってみた。

「アンタ犯人でしょ」

「なんのことかな。おじさんわかんないな」

やっぱりムカつく。さっさと捕まえちゃえ。時間無いし。ん、何か音が上空から聞こえる。

「へへ、捕まるわけにはいかないんだな。逃げちゃうんだな。げへ、げへへ」

巨大なローター音。なーっ、ヘリコプター！ この企画、どん

け金かけてるんだよー。太陽を隠すほどに巨大なヘリによって、上空が遮られる。強い突風が辺りに吹き始めた。しかもロープが垂らされてきた。まずい、これに乗って逃げる気なんだ。そうはさせるかーっ。

素早く私は、犯人の右腕に手錠をガチャリと掛けてしまった。犯人は仰天するものの、構わず逃げようとする。しまった、手錠は片手につけただけ。このままじゃ逃げられる！

「逃げんな！」

お金よこせっ。お前の存在が金券なんだ！ このゲームはお金が全て。タイムイズマネー。でもたぶんこの言葉の使用法は、今は間違ってる。

「あ、危ないぞ。何をするだ」

咄嗟に私は何を考えたか、自分の右手にもう片方の手錠を嵌めてしまった。犯人に逃げられまいとして咄嗟にこんな事をしてしまった。気付いた時には遅い。やばい。

「あ、ちよっと、ちよっと！」

犯人がロープに捕まったのを見計らって、ヘリが上昇を始めた。手が引っ張られる。痛い、痛い痛い！

「くっ」

犯人の男は冷静な判断を下してくれた。上りかけたヘリのロープを放し、地上へと飛び降りてきた。手錠によって繋がっていた私達は、勢いで地面に転がった。ああ良かった。腕がちぎれるかと思った。私そういうバイオレンス的なキャラじゃないし。血まみれの話にならなくて良かった。

「大丈夫ですか。怪我は」

犯人役だった男は、先ほどまでの役柄を捨てて、急にスタッフの一員としての行動を取り始めた。どこかに電話してる。ああそうだった。この人、この番組のスタッフなんだった。犯人ってのは単に役だったんだもんね。

「至急、救急車の手配をお願いします。はい、二十代の女性です。」

腕を軽く捻って怪我しています。ええ、はい……。ちょっと危険な行動に出してしまったようで。企画参加の復帰はちょっと厳しいのではないかと――」

え、私……このままゲームオーバー？ いやいや、腕大丈夫だって。ちよつと紫色になつてゐるとか気のせいだって。ほらほら、ぶんぶん振り回したつて平気平気。ちよつとこのおじさんの右手も仲良く一緒に振れちゃつてゐるけどさ。迷惑そうに見えるけどきつと気のせいだって。

でもさ、やっぱり気まずいからとりあえず頭下げてみた。

「あの、申し訳ありませんでした。危ない事しちゃつて。相手がヘリから下がったロープにぶら下がっているっていうのに、手錠で互いの手を繋いじゃうなんて普通ありえないですよね……」

「まあね。下手をすれば二人とも危険だからね。とりあえず救急車を呼んでもらつたから、君は病院に行つてきなさい」

私はひどくがっかりした様子を見せた。

「だ、大丈夫です。ほら、時間もあとちよつとですし。終わつてからでも――。私、せっかくここまで残つたのに」

犯人役だつたおじさんは困つた表情を見せた。自らも繋がつてゐる右腕を見ると、溜め息をつく。

「……実は、手錠の鍵は俺が持つてゐるんだがね」

あ、きつと本当に手錠で捕まつた時のために、番組が終わつた後でこのおじさんが自分で外せるよう持たされていたんだ。

「俺はこの番組のスタッフだからな。本当の所は参加者に情けを掛けちゃいけないんだが」

おじさんは手錠の鍵を私の右腕まで持つてきた。

「見逃そう。番組が終わるまで何とか救急隊には待つてもらふようにする。せいぜいあと十分そこらだからな。だが、復帰を見逃す代わりに無条件のペナルティ付きだ。『犯人のリーダーは取り逃がした』事になる。俺はこれからまたスタッフに電話を掛けなおさなきゃならんのでな。君に付き合つてゐる時間は無くなつた」

私は何とお礼を言っているのか分からず、ただ一つ深く頭を下げた。

「ありがとうございます」

「ゲームが終わったら医者診察を受けるんだぞ。数分とはいえ、救急隊を待たせるんだからな。普通はこんな事許されないだろう。さあ、時間が無い。もう行け」

時計は無慈悲だった。北側以外のエリアが封鎖されるまで、あと一分も無い。今すぐ行かなければ間に合わない。私は一つ頷くと、走り出した。最後にチャンスくれたんだ、全力で逃げ切ってみせる。何かが……私の中で何かが変わった気がした。

北側エリアに飛び込むようにして間に合ったのは、封鎖五秒前だった。私が到達した直後、警官に扮したスタッフ達がゲートを閉じてしまった。さあ、もう戻れない。ラスト十分だ。ん、メールが来た。いよいよ大詰めってカンジ。

『ハンター化一般人の全員正常化に失敗。四体が残った。同時に、犯人のリーダーも確保失敗。正常化したハンター化一般人達も含め、全てがハンター化。北側エリアに合計十五体のハンターが解き放たれた。』

やっぱり、こうなってしまった。今、目の届く範囲には誰も居ないけど、この狭いエリアの中に確実にハンターが十五体存在する。残り十分、逃げ切れるだろうか。いえ、逃げ切ってみせる。もらったチャンスは活かさなきゃ。

『参加者…東 あずまにしお 西夫さんがハンターにより確保。残り四名』

だんだん消えて行く。秒読みが始まっている。

『参加者…右田 みぎたさとし 左戸流さんがハンターにより確保。残り三名』

ああ、あの私の目の前から逃げていったおじさんと、筋肉マンのお兄さんかあ。逃げた罰よ。名前からしてどっちがどっちだかさっぱりわかんないんだけど。残る三名って、今なら明らかにもう誰だか分かる。

山田よしおと、さっきの神崎っていう女の子、そして私だ。

「って考えてる側から山田よしおが目の前に」

あいつにはスプレーの恨みがあつたので、時間の許す限り問い詰めてみたい。うう、やっぱりさっきやっちゃった腕痛いなあ。紫色になってるし。右手に力が入らない。

「よしおー、あんたよくも」

まあたぶらぶらして歩いてる山田よしおをふん捕まえてみた。無理矢理肩をつかんで向き直らせる。

「あ、どうも、お姉さん。ねえ聞いてくださいよ。あの赤い髪の女の子がね、ひどいんですよ」

「何がひどいってのよ」

なんで男なのにこんな化粧効かせてんのよ、ねえ。似合ってると思ってるわけ。

「僕、ただ英雄になろうと思ったただけなのに、持っていた正気化スプレー全部取られちゃったんですよ。PUN、PUN。ひどいですよね。結局、ハンター化一般人全員元に戻せなかったみたいだし。僕に任せていれば完璧だったのに」

「な、なーにを言っているんだああ」

ぶんぶんって何よ、きめーよ。あ、PUNPUNか。

「で、あんたが正気化スプレーで元に戻したのって何体なのよ」

「え、ゼロですよ。これから探しに行こうって所だったんですから」
いや、っていうか、あの女の子が山田よしおからスプレー奪ったのって、もうけっこう時間が切迫してからだと思ったんだけど私の記憶違いでしょうか。きつとそうだね。そうなんだね。きつと山田よしおの中では、まだめっちゃめっちゃ時間があまってるっていうのに、女の子が無理矢理スプレー強奪していったような感じなんだね。もういい。こいつ捕まってるいい。だって、ハンター化一般人を元に戻すの頑張ってたのって、ほとんどあの女の子じゃん。しかもあんな短い時間で、たった一人で。そりゃ全員なんか見つけられるわけないでしょ。

「やばいですよ。ハンター来ますよ。僕もう逃げますね。さような

ら。もう会う事はないでしょう。僕に会えないからって寂しがらないでくださいね、綺麗なお姉さん」

寂しがりません。さようなら。

「ねえ、行っちゃうんだよ。僕行っちゃうんだよ。寂しがってくれないの？ 英雄が行っちゃうんだよ、寂しいでしょ。ねえお姉さん何とか」

「うざい、消えろ！」

遂にキレてしまった。山田よしおは突然の事に何だか良くわかんない様子で口をぽかんと開けている。もうこいつに関わってもいい事無い。こっちから消えてやる事にした。

「うわ、やめて。やめてよお、僕が何をしたっていうんだああ。うわあ助けて、死にたくない。死にたくない！」

なんか背後でつかい声で叫んでるのが聞こえるんですけど。何、ゾンビでも現れた？ すごいお約束の死に方っぽいんですけど。ん、早速メールが来た。

『参加者…山田よしおさんがハンターにより確保。残り二名』

いかにも雑魚キャラの死に方やん。なんだったのあいつ。ま、いや。これで邪魔者は居なくなった。逃げるのに集中できる。残りは私と、あの赤い髪の女の子かあ。意外と運いいんだなあ、こう見えて。ん、前方から黒いのが来るぞ来るぞ。隠れなきゃ。

しかも二体も同時に。違う方向からやってくる。危ないなあ。時間を確認すると、意外と経っている。残り五分。さあラストスパート。生き残れるか。やっぱり範囲が狭い。歩いているとすぐに端っこに到達する。しかもハンターの目をかいくぐりながらだから非常に疲れる。

ん、何か来る。後ろだ！ やばい、物陰から来ているのに気付かなかった。もう目の前まで迫ってくる勢いでハンターが走ってきていた。とにかく私は走った。ハンターを撒こうと闇雲に走っている内に広場へと出てしまった。ああもう、これじゃ隠れられる場所が無いよー。

「えっ」

建物の影から偶然出てきたのは、あの髪の赤い女の子だった。びっくりした顔で身を引くが、ハンターは追いかけて続けている私じゃなくて、近くに現れた女の子に標的を変えてしまった。

「ちょっと待って、やめて！」

突如向かってきたハンターを避ける術も無く、女の子はハンターに確保されてしまった。何だか分からないまま確保されて連行される女の子を、私は黙って茂みから見ている事しか出来なかった。なんか、後味悪い。ごめんね……。あとでチーズケーキおごってあげよう。うあ、見たくないなあメール。

『参加者…神崎 陽詩さんがハンターにより確保。残り一名』

変わった名前だなあ。下の名前、なんて読むんだろ。後で聞けばいいかな。もういい、ここまで来たら絶対生き残ってやる。あと三分だもん。いけるよいける。私の頭の中ではもうエンディングテーマ流れてるよ。ほら、あの夏の二十一时间テレビとかいうやつのエンディング。名前が思い出せない。

来た来たハンター。前から二体。後ろから二体。さあ、どう切り抜けるの高橋千奈美さん。ここまで来たら誰にも助けなんか求められないんだよ。あと三分間、このハンター地獄の中で逃げ回らなきゃいけないんだよ。

そこから走ってきた。前後を挟まれてて絶望的。でもここで諦めて、たまるか。

「ほらっ」

前方から走り寄ってきた一体のハンターを引き付け、スライディングのようにして脇をすり抜けた。二体目に向かって走り出した。互いにぶつかり合うような形で走り寄る。二体目の手にキャッチされるギリギリまで走ると、突如体を回転させて急に右方向へと滑った。不安定な体勢になりながらも、繰り出してきた左手を避ける。急いで体を立て直し、走り出す。後ろの四体が追ってきている。

前の二体を避けたものの、絶体絶命な状況には変わりない。だん

だん息も上がってきた。また前から二体のハンターが現れたのがうつすらと見えた。走りながら気が遠くなってくる。負けて、たまる、かあー……。

結局、私は逃げ切った。自分でも信じられなかったけど、逃走成功してしまった。終わった瞬間、ハンター達の動きがぴたっと止まったから何事かと思ったけど、続いて私服姿のスタッフが駆け寄ってきてゲーム終了を教えてくれた。そして私は地面に倒れ込んで激しく咳き込み、大の字に寝転がってしまった。こみ上げてくる笑いをこらえる事が出来なくて。スタッフは『お金は後日銀行の口座に振り込む事になります』と言っていたが私は疲れであまり深くその意味を考えなかった。

気付くと腕の痛みがきつくなってきた、私はゲーム終了後のコメント撮影を手早く終わらせると、救急車に乗り込んだ。するとスタッフが一人駆け寄ってきて、今にも閉められそうになる救急車のハッチバックを止めた。

「待ってください。高橋さん」

「どうしたんですか」

「それが、番組側で用意していた賞金が、何者かによって持ち去られたようなのです」

スタッフの顔色は深刻だった。それは冗談でも何でもないようで私は口を開けたまま言葉を失った。

「ふえ……」

「あ、でも大丈夫ですよ。高橋さんへの賞金は、番組が責任を持って別で用意させていただきます」

「はい。分かりました」

何だろう、ただの賞金をかけたゲームではなかったの？ お金を持ち去られたという事は、何か本当の犯罪が関わってるって事になる。何か嫌な予感が私の中を駆け巡ったが、今の私には深くそれを

考える余裕は無かった。

ただ一つ、この賞金を掛けたゲームはただのゲームでなかったという事だけ。何か裏に大きなものを感じる。でも私には関係ない。ゆっくりと羽根を伸ばそう……。

そして、私がこの賞金盗難事件の本当の意味を思い知る事になるのは、それよりもっと先の事だった。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7223r/>

ただいま高橋さんが『逃走中』です。

2011年7月30日03時19分発行